幻想郷に異変を起こすのは妖怪の役目である。
紅魔館のワガママ吸血鬼は日光が苦手だから幻想郷を覆ってみた。
白玉楼のボンヤリ幽霊はただの興味で春を集めてみた。
永遠亭のヒキコモリ姫は月の使者がこれなくする為だけに偽りの満月を作らせた。
大なり小なり毎日異変が起きるような幻想郷ではあるが、しかし妖怪である風見幽香の表情は曇っている。
鬼ヶ島からきた呑んだくれの鬼が終わらない宴会をしてみたり、四季の花全てがいっぺんに狂い咲きしてみたり、変な神様が移り住んできて信仰を集めて見たり。はたまた天界の暮らしに飽きた天人がちょっかいをかけたりもすれば、いきなり吹き出した間欠泉から温泉と一緒に地霊が出てきたり。
たしかに異変は起きた、それも山ほど。人間の巫女が解決した。おまけの黒い魔法使いはこのさい忘れてもかまわないかもしれないが――
それでもここ最近の異変は、幻想郷の妖怪が引き起こしたものではなかった。
「やっぱり異変は妖怪が起こすべきものよねぇ」
しんしんと降る雪を見ながらそんな事を呟く。吐き出された白い吐息の向こうに、一匹の氷精がへーくしょんぅぃなんて言いながら鼻をすすっていた。バカだから風邪をひかないのでは

ない。バカだから氷精なのに風邪をひくのだ。
見るともなしにそれを見ていた幽香の唇がほころぶ。
「ちょっとそこの貴女」
「なんだい……ってアンタは！」
幽香の姿を認めた氷精であるところのチルノは脱兎の如く逃げ出そうとした。
たかがちっぽけな氷精と、最強を自負する大妖怪である。関わればロクな事は無い。
「こーら、待ちなさないな。ちょっと考え事するだけよ」
背中の羽をはばたかせて逃げ出そうとしたその瞬間にむんずと捕まえると、力任せに左右に引っ張る。
「イダダダダ！　はぁーなぁーせぇー！」
チルノの悲鳴を聞きながら思考に没頭する様は大妖怪の貫禄にあふれている、というよりは子供がおもちゃで遊んでいるようにしか見えない。
「そうねー……こういう方向でいいかしら」
チルノの羽がみしみしと嫌な音をたて始めた頃になってようやく幽香はその手を離した。
涙目のままこぞとばかりに飛び出す。
「今だっ！」
足元にいつの間にか絡みついたツタのおかげで地面にビターンと叩きつけられたが、それは

もう幽香の預かり知らぬところであった。
声も出せずにピクピクとやばそうな痙攣をしているチルノを見て満足した幽香はさっと飛び去って行った。

§

季節は巡る。
長い冬が過ぎ、雪解けも終焉を見始めた頃になると、春はまだかまだかと木が芽吹き、花を咲かせる準備を整える。
開花の早い樹木の中にそれはひっそりと紛れ込んでいた。
幻想郷の端に位置する博麗神社には、いつもの通りに春っぽい巫女が境内で箒を左右に動かしている。
「はくちっ！」
可愛らしいくしゃみと、泣きはらしたかのような涙のにじんだ赤い目、ぼうっとしたような表情には朱がさしている。
「うー……風邪かしら……」
風邪にしては熱がでないのよねぇ、なんてぼやきながら掃除を続けていると、一際強い風が

「というわけで、ちょっと死んでみたのよ」
「すいません。貴女が何を言ってるのかさっぱりわかりません」
ここは泣く子も平伏す楽園の最高裁判所。
豪奢な卓に両肘を置いた映姫は、虫歯が痛むような顔つきで目の前の彼女を見つめた。
その永久凍土のように冷たい視線を事も無げに受け流し、癖のある緑の髪をふぁさりと掻き上げた幽香は、かわいそうなものでも見るような目を映姫に向ける。
「だーかーらー何度も言ってるでしょ？　ほら、なんでも外には地獄めぐりとかいう遊びがあるらしいじゃない？　んで私もやってみよーかなーって思ったんだけどー。なんつーか私って地獄に行ってみよーかなーって」
「それで自らの命を絶ったというわけですかっ!?」
「やーねぇ。ちょっと心臓止めただけよ。身体の方はエリーに任せてあるし、しばらくのんびりしてみようかなーと」
「迷惑です。すぐにお帰りください」
「つれないわねぇ。私と貴女の仲じゃない」
「どんな仲ですか」
「王様と犬？」

「帰れ」
ニガウリを噛み潰したような映姫に対し、幽香は「血の池地獄ってお肌に良さそうねぇ」とパンフ片手にうきうきしていた。
ちなみに幽香が持っているパンフレットは是非曲直庁が年に二回発行しているもので、天国と地獄の観光名所がこれでもかと記載されている。仏陀と並んでカンダタ釣り、針の山→血の池→煉獄の鉄人レース、各種神仏のコスプレをして練り歩く天界カーニバルなどのイベント情報が目白押しで、中有の道に出店している各種飲食店の割引券までついており、死者は勿論、生者の間でも好評だ。
まぁ生者の場合、一方通行の片道キップになってしまうわけだがそこはそれ。巻末には米粒に文字を書く匠の技で『ご利用は自己責任で』と明記されているので安心である。
斯様に明るく楽しい死後ライフを、フルカラーのグラビア印刷（表紙は特殊紙に浮き出し箔押しの豪華仕様）で過剰なまでに訴えており、天狗や河童も裸足で逃げ出す高度な印刷技術を惜しみなく注ぎ込んで、しかもそれを無料配布するという太っ腹ぶりだ。
「そんなところにお金を使うから財政難になるのよ……」
疲れたような映姫の溜息もむべなるかな。
閉じた瞼の裏に浮かぶのは先月の給与明細。基本給はここ数十年据え置きの癖に、福利厚生やら設備維持やらの様々な名目で随分と天引きされるようになっていた。

自らの血肉にも等しいサラリーが、こんなコンビニで無料配布しているような雑誌に注がれていると思うと、思わず労組を扇動し無期限ストライキを敢行したくなる。
「いいからほら。さっさと案内しなさいよ」
「私はガイドじゃありません！　それに貴女は一応死んでしまったわけですし、これから裁判を――」
「あー、いいわよんなもん。どうせ私は地獄逝きでしょ？　時間の無駄だわ」
「って自覚あったんですか？」
「そりゃまぁ、愛のままに我がままに、好き勝手放題生きてきたわけだしねぇ。それに天国なんて退屈しそうだもの。行けと言われたって御免だわ」
死して魂だけになろうとも幽香は幽香。
どこまでも傲岸。限りなく不遜。それでこそ風見幽香である。
「ですが手続き上、裁判をしないってわけにも……」
「ならさっさとしなさい。ったく、これだからお役所仕事は」
怒りを通り越して世の無情すら覚えた映姫は、遠くを見つめる眼差しで直属の部下の姿を思い浮かべる。普段なら一仕事終える度に、お茶飲んだり饅頭頬張ったり黒百合の尻を撫で回したりとダラダラし続けるところを「さっさと仕事に戻れこの穀潰し」と尻を蹴り上げるのが日課となっていたというのに、今日だけは逃げるように仕事へと戻っていった。つか逃げた。

「……なんで河に突き落とさなかったのよ」
「ん？　何か言った？」
「いいえ、別に？」
映姫は全てを諦めたような顔で、幽香の罪状について資料を纏(まと)める。
その余りにも膨大(ぼうだい)な罪科に眩暈(めまい)を覚えると共に、これからのことを考え――映姫はもう一度深い溜息を吐いた。

§

「それで何処に案内してくれるの？」
「だから私はガイドじゃないと……そうですね。血の池地獄にでも浸(つ)かってくればいいんじゃないですか？　一万年くらい」
「身も心も蕩(とろ)けそうね？」
「オススメですよ？」
「まぁ、それは兎(と)も角(かく)」
幽香は腰に手を当てて周囲を見渡す。
錆(さび)が浮きまくっている針の山。

「……ん……あれ？」
それは小さな呟きだった。
「……無い」
真っ青な天空と、向日葵を敷き詰めた萌黄の絨毯の狭間で、その呟きはそよ風に消されてしまう。だけど呟いた当人にとって、世の広さに言葉が無力であってもそれはどうでも良い事だ。
太陽の匂いに包まれた急拵えの寝床からのそっと身体を起こして、風見幽香は寝ぼけ眼で辺りを見回す。その視線の反対方向では手が何かを掴もうとがさがさやっていたが、やがて眼と手の動きは止まっていた。
「傘……」
薄ぼんやりとした眼差しがゆっくりと空を見上げ、数回瞬いて、一呼吸。
失くしたのか盗まれたのか、現実的に考えれば後者だろう。そもそも幽香の私物を花が隠す訳が無い。
寝起きの頭がそう結論付けるや否や、瞼はしっかりと開かれて。覚醒した幻想郷の甲種危険物はその姿を凛と立ち上がらせていた。
「仕方ない」
ここからすべき事は全く単純明快である。

傘盗人を見つけ出し、捻り潰して取り戻せば良い。
風見幽香には充分それが出来るのだから。
「行ってきまーす」
太陽の畑の向日葵達に見送られ、手ぶらの幽香は歩きながら考える。
この足を何処へ向けるのが解決への近道だろうか？
手がかりを知っていそうなのは誰だろうか？
「……そうね、楽をしましょうか」
言葉と共に跳躍。そのまま宙を舞うと、幽香は悠々と空を飛んで行った。

・

石畳を掻く竹箒。規則正しいリズムを境内に響かせて、今日も神社は巫女一人。
慣れたものである。
博麗霊夢にとってそれが普通で当たり前で日常で、誰にも邪魔されない自分だけの時間というものはかけがえの無いものもので。
だから孤独が寂しいとかいう事とは全く無縁で、マイペースに安寧に一日を過ごせるというのはとても素晴らしい事だから。

そう。だから、
「ちょっと良いかしら」
「賽銭箱はあっち」
参拝者への態度がよろしくないのは実に仕方の無い事だ。参拝者かどうかは実に疑わしいので尚更である。
「私はあなたに用があって来たのに」
「あんたにあっても私に無いし」
「でも私はあるの」
霊夢は箒の掃く方向を幽香へ向けてやろうかと思ったが、面倒なので止めておいた。そんな事をするよりも、適当にあしらってさっさと帰ってもらった方が有意義だ。
「それで？」
行儀悪く箒を担ぎ、あからさまに非友好的態度で霊夢は幽香に応じる事にした。
「私の傘が失くなったのよ」
相手の態度を意に介さず、微笑みながら幽香は続ける。
「探して欲しいとは言わないから、何処にあるか分からないものかしら」
「あぁ……」
幽香の言葉を聞いて、ようやく霊夢は彼女が傘を持っていない事に気付いた様子だった。

壱

「……ぜはぁっ！」

白玉楼へと続く大階段を上りきったところで、幽香は両膝に手を着いて荒々しく息をついた。

呼吸の度に喉が痛い。更には頭痛、目眩、脇腹痛いの三点セット。いっそこのまま大の字に倒れてしまいたいという衝動に駆られるが、それは大きすぎるプライドが許してくれそうになかった。

真っ昼間の花畑でゴロ寝するのとは訳が違う。こんな状態で倒れたりしたら、しかも背中を地に付けてしまったりしたら――それはイコール負けなのだ。何に負けるのかは自分でもよく解らないが、とりあえず負けなのだ。

だから出来ない。たとえ何に対しても、自ら負けを認めるような事は一切しない。故に倒れない。

最強であり、最凶。

自他共に認める、最も妖怪らしい妖怪。

それこそが風見幽香なのだ。

しかし勝ち負けで言えば、両膝に手をついて息を切らせているこんな状態も如何なものか。

誰かに見られようものなら、それこそ色んな意味で負けてしまいそうなもの。けれど当の幽香はといえば、お構いなしにぜーぜーと荒れる息を隠そうともしないまま、まだ両膝に手をついて地面を睨(にら)みつけている。

しかし、幽香もそこまで頭が回らない訳ではない。今この状態も、自分が感知出来る範囲(はんいない)内に誰もいないことが解っているからこそのもの。もしうっかり誰かがこの姿を見てしまおうものならば、きっとそいつは寸刻先の世界すら見ることは叶わないだろう。

「それにしても……」

後ろを振り返ってみれば、そこにはたった今上り切った階段が遥か眼下へと続いている。

「一体何段あるのよ」

それは上り始める前に呟(つぶや)いたのと一語一句違(たが)わぬ呟き。けれど幽香がそんな事を言ってしまうのも無理はない。事実、見下ろした先は先が霞(かす)んで見えないほど。上る前は朝だったのに、体内時計はとうに昼を過ぎていた。

「はぁ……っとと」

いくらか呼吸も落ち着いたところで姿勢を正すと、今度は立ち眩(くら)みに襲われた。

最強であり、最凶。

身体能力ならば鬼や吸血鬼にも勝るとも劣(おと)らないものを持っている。しかし、こと体力となればそうはいかない。

幽香の生活は基本的に食っちゃ寝なのだ。そこいらの妖怪――主に下僕のような二人――を日々肉体言語でもって苛めているものの、彼女にとってそれが運動になるかと言われれば、必ずしも首を縦に振ることは出来ない。そもそも一方的だから苛めと言えるのであって、ようは運動不足。

その四文字が頭に浮かんだ瞬間、己の意志とは無関係に手が自然と脇腹へと伸びていく。だが肉を摘(つま)むという最も恐ろしい所業は、寸でのところで理性が押し止どめてくれた。

摘める肉などあるはずがない。そう思っていても、恐ろしいものは恐ろしいのだ。もし、万が一、ひょとして――考えただけで、ぶるりと身体(からだ)が震え上がる。

「……この仕返しはきっちりとさせてもらうわよ」

そもそもどうして律義(りちぎ)に階段を上ってきたのか――その答えは、なんとも単純なものだった。

大階段の麓(ふもと)にこれ見よがしに置かれていた立て札。

そこには西行寺の名の下に、なんとも達筆な文字でこんなことが書かれていたのだ。

『飛ぶの？　飛んじゃうの？』

今となっては後悔の念しか生まれてこない。何故(なぜ)あの時、自分はあんな安い挑発に乗ってしまったのかと。

それもこれも、全てはつい先日の事。

今日と同じように、鬱陶(うっとう)しいくらいに澄(す)み切った青空が眩(まぶ)しい日の事だった。